

# 孫太郎虫

浅川寿囿碁同好会 吉開 洋子

江戸時代は、いろいろな変わった商いがありました。たとえば、「舌きりすずめ売り」「七味唐辛子売り」とか、「狐の飴売り」など、今から考えると、現実離れした、たわいもない職業があったようです。でも、これらの商いには、どこか懐かしさを感じられます。

私の子供の頃といいますと、七十有余年前になりますが、「富山の薬売り」がきていました。おじさんが、大きな薬箱を担ぎ、得意先の家を廻って、薬を届けていました。子供を見ると、六角形の紙風船をくれたものです。

薬といえ同じ頃、「孫太郎虫」という薬売りがいました。のどかな山里で、「おうしゅう、せんだいまごたろうむし」(奥州仙台孫太郎虫)の薬売りの呼び声がひびきわたっていました。山里とは、宮城県齊川の一帯のことで、この虫は、川底にすみ、体長4~5センチの黒褐色をし、地方ではゲンゴロウの幼虫とっていました。昔はこの虫を乾燥して、疝(かん)の薬としました。

伝説によると、村には孫太郎と名のつく子供がいて、その子は体が弱く、七歳の年に大病をしました。母の桜戸は、近くの田村神社に三十七日の、断食祈願をしたところ、満願の日に、「齊川の小石の間に住む、ムカデのゴとき虫を食わしめよ」とのお告げがありました。さっそくその虫を採って、孫太郎に食べさせたところ、病はたちまち全快し、疝の虫もおさまったというのです。頑丈な体になった孫太郎は、成人して首尾よく父の仇討ちをとげることが出来たという、ほまれ高い話があります。

さらには、婚礼の際に、この虫を料理して食し、子孫の繁栄を祝うという風習がありました。村では、この虫はカルシュウム源となっていました。以来この虫は、孫太郎虫と名付けられ、滋養食用虫、小児五疝の妙薬として、全国に名前が知れわたったのです。

孫太郎虫の薬売りは、大正、昭和にかけて東京の町でも見かけられました。すげ笠をかぶり背に薬箱を背負って行商していたといいます。私が「孫太郎虫」に出会ったのは数年前のこと、齊川の近くの籠摺り(あぶみずり)坂で、源義経のいわれを尋ね歩いていたときでした。義経は、兄の頼朝に追われて、奥州平泉へ落ちのびるさいに、馬一頭がか

ろうじて通れる山道の途中で、岩に鐙を擦ったのです。その傷跡を探していたおり、私はひとつの石碑を見つけました。石碑には太い字で、「またごろう虫」と彫ってありました。いかにものんびりした村の風景にあった石碑でした。

孫太郎虫の資料館が、田村神社にありました。資料館には、虫の干からびた標本が、たくさん展示されていました。由緒略記によると、孫太郎虫は、当祭中のお告げにより、九百年以前より、強壯靈虫として全国で珍重されていたそうです。

(暮楽連だより 第194号 2007年9月22日)